



名大トピックス

No.111 平成14年9月13日発行 名古屋大学総務部企画広報室 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Te(052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

名古屋大学説明会を開催



松尾総長によるあいさつ



農学部




教育学部



文学部

CONTENTS

| | | | |
|---------------------------------|---|---|----|
| 名古屋大学説明会の参加者、これまでの最多人数..... | 2 | 医学部附属病院・ | |
| 医学部附属病院遺伝子・再生医療センターの創設記念式典が | | 関連病院卒後臨床研修ネットワーク総会を開催..... | 10 |
| 開催される..... | 3 | 工学概論第1「がんばれ先輩!」..... | 11 |
| 言語文化部・国際言語文化研究科の公開講座が開催される..... | 4 | 農学国際教育協力研究センターがオープンセミナーを開催... | 12 |
| 総合保健体育科学センターが | | 国際教育交流担当職員長期研修プログラム(LEAP)に | |
| 「親子で楽しむスポーツ教室」を開催..... | 5 | 参加して～後半：カリフォルニア大学デービス校～..... | 13 |
| 年代測定総合研究センターが体験学習を開催..... | 6 | | |
| 工学部懇話会を開催..... | 7 | | |
| タウンユートリノ検出装置を先端科学技術体験センターへ寄贈... | 8 |  人体再生に挑む 上田 実..... | 18 |
| 医学系研究科において男女共同参画推進講演会を開催..... | 9 | 本学関係の新聞記事掲載一覧(14年7月分)..... | 20 |



名古屋大学説明会への参加者、これまでの最多人数 - 九州、関東、近畿、東海（本学）の4地区で開催 -

本学では、本学進学を希望する高校生に対し、教育・研究の特色の紹介や施設見学を通じて本学への進学の目的意識を持ってもらうため、学内及び全国各地で大学説明会を開催しています。

本年度は、九州（熊本市：7月30日）、関東（横浜市：8月22日）、近畿（大阪市：8月30日）、東海（本学：8月1日、2日）の4地区で開催しました。

学内での説明会へは昨年より3割以上多い4,622名という、これまでの最多人数の参加者があり、8月1日の文科系学部（1,791名）、8月2日の理科系学部（2,831名）とも豊田講堂内は高校生の熱気であふれていました。中でも理科系学部は豊田講堂内に収容しきれない参加者に対して、隣接するシンポジオンホールに椅子席を用意してビデオ生中継を行いました。立ち見の参加者で立錫の余地もない状況でした。

両日とも、午前中は豊田講堂を会場に、松尾総長のあいさつ、伊藤副総長からの全体説明、ビデオによる大学紹介が行われ、午後からは、志望する各学部にお

いての説明会（懇談会、ミニ講義、施設見学等）が、学部長はじめ教官・学生・事務官が一体となって内容に趣向を凝らして行われました。参加した高校生は、各会場で教官や在學生と直接懇談したり、自分の進路等について詳しく説明を聞き、熱心に質問やメモを取るなど熱気にあふれ、終日キャンパスは高校生の姿で賑わいました。

一方、全国各地での説明会は、伊藤副総長、各学部教授、学務部職員らによる周到な準備の下で開催され、受験生、進路指導教諭等の参加者に対し、本学の教育・研究の概要紹介、大学紹介ビデオの放映、入学者選抜方法の説明、高校生向けの講演等が実施されました。参加者からは、入学者選抜方法についての質問や、学生生活、就職及び大学院に関する事など、活発な質疑応答が行われました。また、学部教授による講演は大学における授業の一端を紹介する内容で、参加者にはたいへん好評でした。



関東地区



近畿地区



九州地区



医学部附属病院遺伝子・再生医療センターの 創設記念式典、記念講演会が開催される

平成14年4月に医学部附属病院に設置された遺伝子・再生医療センターの創設記念式典及び記念講演会が、7月26日に医学部鶴友会館において開催され、学内外の関係者90余名が出席しました。

現在医学部では、従来の基礎講座・臨床講座の融合や、学部を超えた学際的研究が加速度的に進行しており、同時に有機的かつ弾力的な大学院教育・研究体制も整いつつあります。なかでも遺伝子医療分野及び再生医療分野では、臨床応用における先駆的な情報の発信基地としてここ数年、多数の臨床成果を報告してきました。こうした中で、遺伝子・再生医療センターが特定機能病院であり地域の中核病院でもある本学医学部附属病院内に設置されました。

同センターでは、現在各講座や診療科内で展開されている先端医療開発に向けた優れた基礎研究を支援し、実用化医療へと発展させるための探索医療施設として位置づけられています。同センターの開設を契機に、今後クローズアップされてくる大学主導型臨床研究を

積極的に進め、我が国独自の最先端医療を開発し、さらにこの成果を産学連携により実験的医療から実用化医療へと展開し、最終目標である社会福祉の向上及び医療産業の促進へと継いでいくことを掲げています。

創設記念式典では、二村病院長の式辞、松尾総長のあいさつの後、来賓を代表して、祖父江逸郎名誉教授の祝辞があり、特に国立大学が直面している法人化の動きのなかで、同センターの存在が本学の今後の発展にとって極めて重要であると述べられました。次いで、吉田純 センター長から同センターの概要及び遺伝子医療分野の今後の研究計画について紹介があり、さらに、上田実 副センター長から再生医療分野の研究内容と今後の展開について説明がありました。

創設記念講演会では、新井賢一 東京大学医科学研究所長による「東京ゲノム・ベイ計画 オーダーメイドのゲノム医療と付加価値の高い新産業の創成」と題した講演が行われ、参加者はその壮大な計画の内容に深く感銘を受けました。



松尾総長



二村病院長の式辞



記念講演
東京大学医科学研究所長 新井賢一氏



言語文化部・国際言語文化研究科の 公開講座が開催される

言語文化部・国際言語文化研究科は昨年引き続き、公開講座「美と文化」、「英語研究と教育のためのコーパス利用 UNIX、Perl、統計と語法文法」の2講座を開催しました。

公開講座「美と文化」では、福田真人 同研究科教授及び山口庸子同研究科助教授を講師に、6月15日から7月13日までの5回、毎週土曜日に開催されました。語り尽くすのが難しく、たとえば、美を考究する美学であれ芸術学であれ、いまだにその全体像を完全には捉えられないでいる美。物事がボーダレスになり、人々が多様な観念や価値観を有することができるようになった今日、あらためて美とは何かを考え直してみる必要があるのではないだろうかという考えから、人々の好き嫌い、美醜の観念、美男美女へのあこがれ、ファッションの変遷、それらの中に、歴史と文化、言語と行為の様々な相を見ようというもので、20代から70代までの幅広い年齢層からの受講者が講義に熱心に聞き入っていました。

また、公開講座「英語研究と教育のためのコーパス利用 UNIX、Perl、統計と語法文法」は、前年度、受講希望者が多数あったため、今年度も引き続き7月25日から7月28日まで4日間にわたって開催されたもので、滝沢直宏 同研究科助教授の他、国際開発研究科の木下徹 教授、杉浦正利及び大名力 助教授の4名を講師に、北は北海道から南は九州までの、大学教員、専門家を含めた41名が受講しました。

コーパス（電子化された言語資料）を用いて言語研究を行うには、コンピューターに関する知識と、コーパスから得られる数値データを処理するための統計学が必要になります。この講座では、UNIX ワークステーション（一人一台）を使って、基礎的なテキスト処理ツールの使い方の練習から始め、Perlによるテキスト処理のためのプログラミングの基礎、コーパス利用のための統計学の基礎を講じ、さらに英語の研究・教育でどのようにコーパスを活用していくかということ論じました。





総合保健体育科学センターが 「親子で楽しむスポーツ教室」を開催

総合保健体育科学センターでは、小学生とその保護者を対象として、公開講座「親子で楽しむスポーツ教室」を、5月25日、6月8日、22日、7月6日の4日間にわたり、大幸キャンパス体育館とグラウンドを利用して開催しました。

この講座は、基本的な身体の動きを獲得しやすい学童期にさまざまなスポーツ（ラグビー、テニス、ベースボール、サッカー）を体験してもらい、走る、打つ、投げる、バランスをとるといった基本的で大切な身体

の動きを早い時期に身につけてもらうことを目的として開催されたものです。

同センター教官をはじめ、指導資格のある院生や体育会運動部の学生、名古屋グランパスエイト・コーチの協力のもと、40名以上の参加者らは親子で一緒になって走ったり、汗をかいたりして楽しみました。本年度は保護者の参加も多く、スポーツを通じた親子の交流や地域交流の活性化にも貢献できました。



ラケットの握り方を指導



平均台でバランス感覚、輪を飛んでリズム感とバランス感覚のトレーニング



年代測定総合研究センターが体験学習を開催 - 石がいつできたか調べよう -

年代測定総合研究センターは、7月29日～31日の3日間、仲井豊 愛知教育大学名誉教授(前同大学学長)と柴田賢 名古屋文理大学教授(元年代測定資料研究センター長)を特別講師に招いて、体験学習「石がいつできたか調べよう」を開催しました。これは、自然を解き明かすことのすばらしさを体験するために企画された平成14年度大学等地域開放特別事業で、県内及び近県の小学生21名・中学生13名・保護者6名が参加しました。

初日は愛知県東部の本宮山に出かけ、珪線石片麻岩を題材に取り上げて地質観察を実施しました。岩石を割った面に現れる珪線石の結晶を初めて観察して全員が興奮気味となり、一心不乱にハンマーを振ってたくさんの標本を採取しました。

2日目は年代測定のために、岩石中に極微量にしか存在しないジルコンの分離を腕かけ法で挑戦しました。失敗にもめげず作業を繰り返し、全員がジルコンを分

離してプレパラートの作成に成功しました。また、珪線石片麻岩の薄片を偏光顕微鏡で観察して、海底に堆積した砂や泥が深さ12～15kmまで沈みこみ、約700という高温で変成したものであることを学びました。

3日目はCHIME年代測定を実施しました。ウラン・トリウム・鉛の分析値からグラフを使って年代を読み取り、珪線石片麻岩の変成作用が1.01億年前に起きたことを解き明かしました。最後に全員に修了証が手渡され、岩石標本や分離したジルコン・プレパラートをその顕微鏡写真と共に宝物のように大切に持ち帰りました。

後日、参加した児童・生徒から石に関する質問が多数あり、また、所属する小中学校の学校長からは「自然に対する子どもの関心を触発する」など同センターの体験学習に期待する旨の手紙やメールが数多く寄せられました。



岩石の採集



ジルコンの分離実習



工学部懇話会を開催 今年のテーマは、「工学部における教育と研究について」

工学部懇話会が、7月11日に工学部4号館講会議室において「工学部における教育と研究について」をテーマに開催され、愛知、岐阜、三重の東海3県を中心に静岡、京都、岡山の各府県も含めた57高等学校から64名の高校教諭と、工学研究科の教育体制委員会委員、学生生活委員会委員を兼ねる教授が出席しました。

会議に先立ち、後藤工学部長からあいさつと懇話会の主旨について説明が行われ、毛利佳年雄 工学研究科教授（電気工学専攻）及び原口紘丞 同研究科教授（応用化学専攻）がそれぞれスライド等を使用して同学部における物理系、化学系の研究内容について説明を行

いました。さらに、教育体制委員会委員長の小野木克明同研究科教授から、本学部の教育カリキュラムについて説明があった後、質疑応答が行われました。

この懇話会は、工学部の自己評価の一環という側面から、毎年同時期にテーマを決めて開催しており、従来、教育に焦点を絞り、入試問題を中心に意見交換を行い大きな効果を挙げてきましたが、今回は少し視点を変え、大学の研究についても理解を深めてもらうことを目的に開催したもので、好評のうちに閉会しました。



あいさつをする後藤工学部長



タウニュートリノ検出装置を 先端科学技術体験センターへ寄贈

丹羽公雄 理学研究科教授を中心とした研究チームは、平成10年にアメリカのフェルミ国立加速器研究所の加速器を利用して、原子核乾板という特殊な写真フィルムを使って世界で初めてタウニュートリノの発見に成功しました。その時使用された日本の最先端の技術を結集して制作された実験装置を岐阜県先端科学技術体験センター・サイエンスワールドへ寄贈することになり、その受領式が7月25日に同センターで行われました。

受領式には、本学関係者、研究者、地元関係者ら約50名が出席し、初めに同センターの飯尾正和館長がタウニュートリノ検出装置寄贈に至る経過を説明した後、山下 理学研究科長から坂田俊一 岐阜県副知事に目録を贈呈しました。続いて、丹羽教授が「ニュートリノは分かりにくいとされているが、この装置を見て科学

者を目指す子供が出てくれればうれしい」とあいさつをしました。さらに、坂田副知事、山内泰二 フェルミ国立加速器研究所副所長ら多数の来賓からのあいさつがあり、ニュートリノ・コーナーオープンのテーブルカットの後、丹羽教授が同実験装置の説明をしながら実際に稼働させ、宇宙から常に降り注いでいる目に見えない多くの粒子の流れ(宇宙線)がライブでプロジェクターに映し出されると、出席者から感嘆の声が上がりました。午後からは、同教授が地元高校生、高校教員や一般参加者を対象に「ニュートリノの現状と今後」と題した講演を行いました。

同センターへの寄贈の効果として、超最先端の研究現場と実物の装置を通して次代を担う青少年に、日本の科学研究と科学技術の偉大さを実感させるとともに、将来、研究者や技術者になることが期待されます。



目録を贈呈する山下理学研究科長
右は坂田岐阜県副知事



タウニュートリノ検出装置を説明する丹羽教授



医学系研究科において 男女共同参画推進講演会を開催

医学系研究科では、7月11日、國信潤子 愛知淑徳大学教授（名古屋市男女共同参画推進懇話会委員）を講師として、「男女共同参画社会とは」と題した講演会を開催しました。

この講演会は、医学系研究科及び医学部附属病院における男女共同参画推進の一環として、この問題の重要性を教職員等に周知するとともに、社会的識見及び認識をすることにより、意識の啓発及び一層の資質の向上を図ることを目的としたもので、教職員等約60名が出席しました。

はじめに勝又医学系研究科長から、男女共同参画は本学としても最重要課題と位置づけているとのあいさつがあり、引き続き、國信講師から、男女共同参画社会基本法は、性別に関わりなく個人としての人権を尊重し、能力を発揮することができる社会の実現を目指して施行されたこと、積極的な差別の解消策、大学における平等なジェンダー（gender：社会的・文化的につくられた性別のこと）関係等について話され、男女共同参画の認識をより一層深めることができました。





医学部附属病院・関連病院 卒後臨床研修ネットワーク総会を開催

平成14年度名古屋大学医学部附属病院・関連病院卒後臨床研修ネットワーク総会が、7月13日に名古屋市公会堂において開催されました。

この総会は、卒後臨床研修を行っている本学医学部附属病院長、関連病院長及び研修担当者が毎年一回一堂に会し、より良い卒後臨床研修の実現のため、意見交換及び情報交換を行うとともに、医学部6回生が卒業後の研修病院の情報を得るために行われています。

今年度は、65の関連病院の病院長をはじめとする医師等125名、本学学生71名及び他大生89名の合わせて285名が参加しました。

第一部は、村田貴司 文部科学省医学教育課長、

勝又医学部長、二村ネットワーク代表（名大病院長）及び小倉 学生卒研委員長のあいさつに続き、松尾 卒後臨床研修センター長による「平成15年度に向けたネットワークの行事予定と研修病院決定方法について」と題したネットワークの説明があり、その後、ネットワーク規約の承認及び役員の選出が行われました。

第二部の Meet The Director は、前半はグループ形式で各病院ごとにプレゼンテーションを行い、後半はブース形式で、学生が希望の病院を選んで直接担当者に質問を行うなど、熱心に研修病院の情報収集に取り組んでいました。



村田 文部科学省医学教育課長によるあいさつ



工学概論第1 「がんばれ後輩！」 - 先輩から、何かを学べ 後輩よ -

工学部は、7月24日、25日の両日、工学概論第1「がんばれ後輩！」を1年生を対象に開講しました。同科目は、社会の第一線で活躍されている同学部卒業生の先輩を講師に招き、工学を学ぶ意義、面白さをそれぞれの体験をもとに講義していただくもので、同学部に入学して3ヶ月余りが経過した学生に、改めて大学で何を学ぶのか、自分の目標をどこに定めるのかを考える契機となるように、例年実施しているものです。

当日は230名もの学生が受講し、熱心に先輩の話に聞き入っていました。受講後のレポートによれば、「技術者としての生き方や姿勢について、自分の人生にプラスになった」、「トップ企業は、単に利潤の追求ばかりでなく、より広い視野で活動を行っていることがわかった」、「明確な目標をもち、達成する強い信念が大切である」、「世界展開する仕事が非常に魅力的で自分も世界に通用する仕事がしたい」、「工学部の学生に問われている資質が聞けて、自分自身にとって足りない

部分と良い部分を改めて認識できた」等々、まだ大学生活を始めて間もない学生達にとって、これから先の大学生活、とりわけ工学部学生として何を学ぶべきなのかを問いかける機会を与えることとなり、受講生にとって実りあるものとなりました。

(講義日程)

平成14年7月24日(火)

10:30~12:00 トヨタ自動車(株)第2開発センター ZE
チーフエンジニア 吉田 健氏

13:00~14:30 (株)インフォウェア 代表取締役社長
鳥居 聖氏

平成14年7月25日(水)

13:00 ~ 14:30 (株)NTTドコモ東海 特別参与
足立邦彦氏



講義を行う鳥居先輩



講義を行う足立先輩



暑い中、先輩の興味深い講義に耳を傾ける学生達



農学国際教育協力研究センターが オープンセミナーを開催

農学国際教育協力研究センターでは、平成14年度のオープンセミナーを開催していますが、7月1日に第2回、7月18日に第3回、7月23日に第4回及び7月24日に第5回をそれぞれ開催しました。

第2回では、ミシガン州立大学の山口富子氏を講師に招き、「インドにおける遺伝子組換え作物の受容」をテーマとして、インドにおけるBtワタ（殺虫効果のあるワタ）の受容に関する社会学的な調査について、インドのメディアに現れた論調の分析、政府の対応と反対論調の衰退に至る過程を説明し、11名の参加者によって討論が行われました。

第3回は、メルボルン大学教育学部事業評価センター所長のジョン・オーエン博士を講師として、「大学における評価・改革・組織革新」をテーマに講演を行いました。本学で現在、組織改革検討委員会のもとでメルボルン大学の戦略プランを参考に、全学中期目標の戦略的ドメイン（領域）づくりに取り組んでいることもあり、目標・計画・評価小委員会の池田教授（総長補佐）、財務・会計小委員会の伊藤附属図書館長、山本生命農学研究科長をはじめ、教官、大学院生、留

学生等30名の参加者から、活発な質問、討議が行われました。

第4回では、世界自然保護基金（WWF）日本委員会・自然保護室長の佐藤 哲氏を講師に「マラウイ湖の事例に見る持続的資源利用のための基礎研究のあり方」をテーマに講演があり、26名が参加しました。マラウイ湖で取り組まれたJICA研究協力プロジェクトを事例とし、漁民の生活向上を目指した持続的な魚類資源利用と環境保全問題を考えるうえで生態系保全研究が何故重要なのか、という点に焦点が当てられました。

翌日に開催された第5回では、5月から7月にかけて同センターの客員研究員として滞在したT.J. Msogoya ソコイネ農業大学（タンザニア）（専任）講師を講師として「農業分野における南南国際協力の分析視点 - アフリカに焦点をあてて - 」をテーマに講演が行われ、東アフリカ（主にタンザニア）における農業分野での途上国同士の国際協力事例の紹介及びそれらの問題点が指摘され、留学生を含む大学院生や教官など16名の参加者が、熱心に討議を行いました。



REPORT

国際教育交流担当職員長期研修プログラム(LEAP)に参加して ～後半：カリフォルニア大学デービス校～

国際交流課 横家 奈美

平成13年6月から平成14年6月までの1年間、文部科学省が主催する国際教育交流担当職員研修(LEAP: Long-term Educational Administrators Program for International Exchange)に参加しました。本誌第103号に前半のモンタナ州立大学での研修について中間報告をいたしました。今回は後半の赴任地、カリフォルニア大学デービス校における研修についてご報告します。

前半は14名の研修生全員が、モンタナ州立大学において語学研修と米国の高等教育制度についての講義等を受けました。平成14年1月からの後半は、それぞれ全米各地の大学に分かれ、国際交流関係のオフィスでインターンシップ(実務研修)を行いました。そして、帰国直前の5月下旬には、テキサス州のサンアントニオにおいて全米の国際教育交流関係者の集うNAFSA(Association of International Educators: 国際教育者協会)の年次総会への参加を最後に、研修を終えました。

この長くもあり短くもあった1年間を振り返ってみますと、すべての研修は、非常に充実した有意義なものでした。たくさんの方々との出会いがあり、時には悩み苦しんだこともありましたが、これらの体験は私の今後の人生にとって、プラスになることと思います。

カリフォルニア大学デービス校

後半の平成14年1月から5ヶ月間、カリフォルニア大学デービス校(UCD: University of California, Davis)に赴任しました。カリフォルニア大学といえばUCLAとUCバークレー校が有名ですが、10校のキャンパスをもつUCのなかでもデービス校の学生数は3番目に多く、キャンパスの面積ではトップです。

主要な教育研究分野は、農学、生物学、バイオテクノロジー、環境学、芸術、人文科学、工学、経営学、法学、医学などです。また、獣医学は全米一位の名声を誇ります。その他、カリフォルニアワインで知られるナパやソノマなどのワイナリーに近いこのキャンパスではワイン研究も盛んです。

キャンパスのあるデービス市は州都サクラメントから西へ車で20分、サンフランシスコからは東へ約2時間のところに位置しています。夏は40度を越す暑さに見舞われます。私が到着した1月はカリフォルニアの温暖なイメージとは全く違って、霧のかかった雨の日が多く、肌寒い日々が続きました。デービス市の人口は約6万人で、その半数近くがUCDの学生で占める大学町です。30分もあれば車で町を一巡りできてしまうほどの規模です。車道の脇には必ず幅広いバイクパス(自転車用道路)が整備され、大学関係者の大多数が自転車で通勤・通学しています。環境都市としても有名で、ソーラーシステムの利用は、全米でも特筆すべきものがあります。町並みも美しく、車よりも自転車



カフェテリアやブックストアのあるメモリアルユニオン

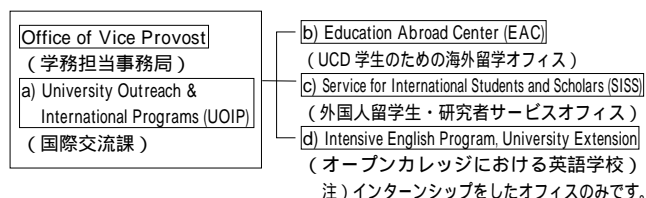
のほうが多く、自転車と人が共存しています。学生組織により運営される公共バスシステムも発達しています。カリフォルニア州のなかでも他市に比べると治安は良く、教育研究に専念する者にとっては最適な環境です。

キャンパスのアメリカ人学生約2万6千名のうち、約40%が白人系、約30%が中国やフィリピン、韓国などのアジア系です。また、約90カ国から来ている約1,600名の外国人留学生の出身地域は中国、韓国、日本をはじめとするアジアが過半数を占め、ヨーロッパ、ラテンアメリカがその次に続きます。さらに、約80カ国からの外国人教員・研究者の出身国は、中国、日本、韓国、ドイツが多く、全体の合計では1,100名以上にのぼります。このようなインターナショナルな雰囲気のあるキャンパスにおいて、外国人である私は何ら違和感がなく、国際教育交流分野でのインターンシップを体験するには非常に恵まれた環境でした。

インターンシップ

インターンシップは、監督であるデニス・ダチキー氏に会うことから始まりました。副学長補佐 (Associate Vice Provost) である彼は、大学全体のインターナショナルプログラムを指揮・監督する立場にあります。学内の国際交流関係のどのオフィスを訪ねても彼を知らない人はおりません。このように顔が広い彼の助言により、5月までの5ヶ月間、下記の4箇所の部署でインターンシップを行うことにしました。本誌では、彼のオフィスであり、事務局国際交流課にあたる、University Outreach & International Programs (UOIP) についてご紹介します。

(参考)UCD のインターナショナルプログラム関係部署



University Outreach & International Programs (UOIP)

UOIP は、大学事務局の四つの Office of Vice Provost (学務担当事務局) のうちの一つであり、全学の国際交流活動の推進を図っています。スタッフは国際交流担当副学長 (Vice Provost)、ディレクター、その下に2名の副学長補佐 (Associate Vice Provost)、その他会計担当者、秘書・レセプションリストなどを含めて9名です。

監督であったデニス・ダチキー氏はアドミニストレーター (大学行政官) であり、イタリア文学の教鞭を執るファカルティー (教員) でもあります。アドミニストレーターとしては、海外の大学との学術交流協定の窓口の役目を果たし、海外の大学や窓口教官との連絡調整や来客対応を行っています。またファカルティーとしては、夏にイタリア短期留学プログラムの学生グループを引率するディレクターとしても活躍しています。このような常に忙しいスケジュールにも関わらず、日本人であるインターンの私を快く受け入れて、丁寧に指導してくださいました。

インターナショナルプログラムに関するウェブサイトづくり

ここでの私のプロジェクトは、UOIP のウェブページ作成のための情報を収集することでした。国内のみならず海外の優れた研究者、学生を集めるためには、



UOIP のあるムラクホール (事務局)



UOIPのスタッフと

ウェブサイトによる情報提供や大学のPRは最も効果的な方法です。国際交流関係分野の事務が集中化されないUCDでは、「インターナショナルプログラム」の範疇に属するものは、キャンパス中に散在しており、ウェブページについても集中化されていません。国際交流に関するまとまった情報を提供するために、これらの情報を大学事務局であるUOIPウェブ内の一ページにまとめます。キャンパスのみならず、デビスの地域社会に存在するありとあらゆる国際交流に関する情報を網羅するのがこのウェブサイトです。ここを訪れば、誰でも簡単に必要な情報を得ることができるようにすることが、私のプロジェクトのねらいでした。実際に情報を検索してみると、それぞれの部署が充実したウェブページを独自に作成していることが多く、UCD内だけでもあまりに情報の多さに驚きました。情報収集のため、それぞれのオフィスの担当者へのインタビューの機会も多々ありました。このように、UOIPは、大学の国際交流に関する管理・運営のみならず、情報発信という重要な役割を果たしていることを、インターンシップを通じて学ぶことができました。

学術交流協定の窓口 - UCDの現場から

前述のプロジェクトのほか、海外の大学との学術交流協定締結がどのように行われているか現場を体験することにより、様々なことを学びました。

UCDにおいて、従来は海外の研究者との交流は研究

者間において個別に行われることが多く、大学間の学術交流協定による交流は脚光を浴びることはありませんでした。しかし、近年では、大学の国際交流活動を推進していくためには、大学間交流協定締結による交流が主流となってきています。協定締結によって、研究者間の共同研究のみならず、交換留学制度などの留学交流プログラムや、行政官の交流プログラムの設立を、UCD全体を挙げて推進しています。日本の大学においても、このように海外の大学との連携を強化し、大学の国際化を図っていくことが今後の大学運営の重要な課題であると思います。

UCDの海外の大学との国際交流にとって、デニス・ダチキー氏の存在は非常に重要です。研究者間から始まる交流も、大学間の学術交流協定締結まで話が進展すると、大学の窓口となるコンタクトパーソンが必要となります。UCDにおいては、国際交流の専門家である彼を窓口にするため話は早く、協定締結の手続きも迅速になります。このように事務局に海外との交流協定の直接的な窓口を置くことは、大学間の連絡調整をスムーズに行うことができるため、海外との交流を推進するうえで非常に効果的です。大学間交流が研究者主導で行われている日本の国立大学に対し、UCDの事務体制は非常に優れていると感じました。

インターンシップの期間中、デニス・ダチキー氏やウィリアム・B・レイシー副学長（Vice Provost）のもとには、海外の大学からの訪問者が絶えませんでした。渡米前は、本学の国際交流課に所属し、海外の大学からの総長に対する表敬訪問等を課内で担当していたため、日米間の事務体制を比較することができました。UOIPでは日本からの訪問者との懇談への参加の機会があったため、オフィスでのインターンシップは一層興味深いものになりました。

アメリカ人学生像

一般的に、アメリカの大学生は勤勉であると言われています。「アメリカと日本の大学生の相違点は何だろう？」と日々疑問を抱いておりました。UCDキャンパ

スでの5ヶ月間はオフィスでのインターンシップや、大学の授業を聴講することにより、学生たちの生活を身近に見ることができました。

クォーター制を採用しているUCDでは、夏休みを除いて、1学期は10週間続き、年間3学期あります。授業のある10週間は、休まず受講したうえ、レポートを提出し、中間テスト・期末テストを受けたりして、非常に多忙な生活を送っています。卒業に必要な単位を少しでも早く取得しようと、暇さえあれば本を広げ、寸暇を惜しんで勉強に励んでいる学生たちの姿はキャンパスのあちらこちらで見ることができます。

「入学は広き門、卒業は狭き門」といわれているアメリカの大学では、学生一人一人が目的意識を持って勉学に励んでいます。学部生は将来の進路をよく考え、将来の夢に直接結びつく授業科目を選択しています。専攻は3年次までに十分な時間をかけて決定すればよく、その後の専攻の変更や、コミュニティーカレッジ（短期大学）からの編入学も比較的容易です。その反面、将来の進路を変更するために退学する学生も少なくありません。

また、学生のうちから社会経験を積むため、キャンパスでの授業ばかりでなく、学内外でのインターンシップや地域でのボランティアに活発に取り組む姿にも頭が下がりました。このように、学生にとって大学とは、将来の職業選択に向けた一種の訓練の場であるといえます。

学生たちの大多数がキャンパス内の寮や、近くのアパートに住んでいます。彼らにとって大学は日常生活のステージです。学生生活の大半をキャンパスで過ごす彼らにとって、大学の教官とは親密な関係にあります。研究室のドアを気軽に叩く学生は珍しくなく、教官は学生の質問や相談に快く対応します。

また、事務職員にとって、学生が非常に身近な存在であることは、日本の大学との大きな違いです。学生は、キャンパスでのインターンシップやアルバイトを通じ、多くのオフィスで活躍しています。インターンシップ先の一つであったEAC（Education Abroad

Center：UCD 学生のための海外留学オフィス）では、海外留学を体験したアルバイト学生が何人かいました。留学経験を生かし、訪れる留学希望の学生に対し、適切なアドバイスをしていました。また、事務職員のアシスタントの役目も果たしていました。学生たちは仕事を任せられ、職員からも信頼を得ており、両者はお互い持ちつ持たれつの関係にありました。これは、EACに限ったことではなく、キャンパスのどこのオフィスでも、学生をうまく活用し、潜在能力を引き出す人材活用の巧みさには感心させられました。

顔のある大学 - 大学の広報について

インターンシップを通じ、オフィスでの業務を体験したことや、ウェブサイトの情報集めに専念していたこともあり、大学の広報活動について様々な面から学ぶことができました。

アメリカの大学は顔がはっきりしています。つまり、社会へ向けた広報活動が活発で、大学の抱える最新の課題や、教育・研究への取り組み方が非常にわかりやすくなっています。

まず、キャンパスにはビジターズセンターがあり、学外からの訪問者に対し、情報を提供するばかりでなく、毎日キャンパスツアーが行われています。私も実際に参加しましたが、よく訓練された学生ガイドによるプロ並のキャンパスについての解説には目を見張るものがありました。

また、キャンパスの各地には毎日、“The California Aggie”という無料のキャンパス新聞が置かれています。これはUCDの教育・研究活動について情報にとどまらず、キャンパスのイベント、学内の講演会、就職、インターンシップ、アルバイト、リサイクル広告に至るまで、ありとあらゆる情報が掲載されています。これを読めば、キャンパス内で今何が起きているのか最新の情報を把握することができます。学生・教職員は、毎朝コーヒーカップを片手にこの新聞に目を通すことから一日を始めます。これほどの情報をもった無料の新聞が、毎日キャンパスで発行されていること

は驚くべきことであり、私もできるだけ毎日目を通すようにしていました。

キャンパスを開放的な雰囲気にすることも、広報活動の一部であると考えます。UCDのキャンパスは緑が多く、広大な敷地に建物がゆったりと建てられています。学生の集う芝生広場もたくさんあります。公道との境目には塀など一切なく、キャンパスは地域の人々の散歩道ともなっています。このように学外関係者以外でも自由に出入りできる開放的な雰囲気は、教育・研究という本来の大学の機能を超えて、地域社会における交流の場としての機能も果たしていることも強調すべき点です。

日米国際交流担当者比較

インターンシップ等を通じ、多くの国際交流関係の事務職員との出会いがありました。この体験を通じ、国際交流担当者の資質については、大きな差異があると感じました。それはこの分野における専門性の有無です。

アメリカの大学行政官のうち、ディレクターなど各部署の要職に就く者はPhDなどの学位取得者が多く、この分野においては豊かな専門性知識・経験を身につけています。そして各々が、プロ意識、問題意識を持ち、エキスパートとして活躍しています。なかには、前述のデニス・ダチキー氏のように、ファカルティと兼務している者も少なくありません。

一方、ゼネラリストを育てる日本の人事制度には、幅広い知識を身に付け、大学経営に多様な分野から取り組むことができるという利点があります。しかし、国際教育交流の分野においては、必ずしもこの制度が最適とは思えません。現在の国立大学の事務官は、公

務員試験により採用され、採用後は、数年ごとに異種の部署間での人事異動があります。このような人事制度のなかで、国際教育交流担当者に分野に求められる資質は身につけにくいと考えます。それは、語学能力、外国の教育制度に関する知識、異文化理解などの専門性です。これには、継続的な職務経験も含まれます。人と人とのつながりにより成り立つ国際交流の分野において、数年ごとの異動があれば、それまでに築いた人間関係は継続性を失ってしまいます。ゼネラリストを育成する日本とスペシャリストを育成するアメリカは全く異なっています。文化的・歴史的背景などを考えると、これらを単純に比較することはできません。しかし、今後の国立大学の独立行政法人化に伴い、大学の国際競争が活発化していくなかで、国際交流担当者の育成については、皆で検討しなければならない問題と考えます。

本研修を通じ、アメリカの二つの大学における国際教育交流についての知識と理解を深めることができたことは、何ものにも代えがたい貴重な経験でした。この経験を、名古屋大学での今後の職務に少しでも活かしたいと考えております。

最後に、この一年間LEAPに参加させていただき、文部科学省、名古屋大学、モンタナ州立大学、そしてカリフォルニア大学デービス校の関係者の皆様方には、多大なご配慮とご理解をいただきましたことを、この場をお借りし、感謝申し上げます。

(参考)

カリフォルニア大学デービス校: <http://www.ucdavis.edu>



人体再生に挑む

上 田 実

再生医学ってなに

最近、「再生医学」という言葉をよく耳にされるでしょう。再生といえばイモリやプラナリアの再生をすぐに思い出しますが、果たして人間にも同じことが起きるのでしょうか。もしも人の体も自由に再生できるとしたら、人工臓器も臓器移植も必要でなくなりこんなに素敵なお話はありません。そこではじめに再生医学の目指す人体再生の戦略について説明してみましよう。

人の体は60兆個の細胞からできていて、これらが分裂したり分化したりして組織や臓器を造っています。病気や事故で人の体が傷つくと、細胞の中で特に元気のある細胞（幹細胞）が分裂をはじめ傷を治します。しかし大人の体にはごくわずかの幹細胞しか残っていない（赤ん坊の200分の1）ので傷が治りにくいのです。イモリのような下等動物では体のいたるところに幹細胞があって、いつも再生の準備をしています。さらにこれらの幹細胞は、どのような細胞にも分化することができるので完全な再生が可能なのです。

再生医学はこのようなイモリやプラナリアの再生のメカニズムを踏まえて幹細胞を利用して人体再生のメカニズムを解明するとともに臨床応用の手段を探る科学ということができます。

人体再生と幹細胞

われわれ成人の体の中にも、わずかですが幹細胞が残っています。脳には神経幹細胞、肝臓には肝幹細胞などが見つけられています。これを体性幹細胞と呼びます。こうした幹細胞は原則的には特定の組織や臓器の細胞にしか分化しません。一方、受精卵からは、どんな細胞にも分化することができる胚性幹細胞（ES 細

胞）が樹立されています。胚性幹細胞をつかえば、理論的にはどんな体の組織臓器も再生させることができます。このように再生医学で使われる幹細胞には体性幹細胞と胚性幹細胞があります。体性幹細胞は、自分の体の細胞を選択的に増やして使うので、一種の自家移植と考えられ免疫拒絶や他者からの感染の危険はありません。しかし得られる細胞種が限られる上に増殖能にも限界があって無尽蔵に増えるわけではありません。その反面、胚性幹細胞を使えばいかなる種類の細胞もほぼ無制限に得ることができます。しかし問題もあって、細胞分化のプロセスが完全に制御できないので腫瘍化する危険性があるのと、ヒト受精卵を使うという倫理的問題が解決されていないのです。ですから当面、実際の医療への応用となると体性幹細胞を使うのが現実的と考えられているのです。

体性幹細胞を使った再生医療

体性幹細胞で一番ポピュラーなのは皮膚の基底層にある表皮幹細胞です。この幹細胞の分離増殖方法は1975年に Green らによって確立しています。彼らはその方法を発展させ火傷に応用できる培養皮膚を完成させました。その後、幹細胞はさまざまな臓器で発見されて、また細胞の増殖の足場となるさまざまな人工材料の発展もあり、この分野は急速に発展しました。図1に再生研究が進んでいる組織、臓器を示していますが、現在ではほとんどの人体が幹細胞で再生できるようになってきています。われわれの研究室では、培養皮膚の研究に始まり、骨、軟骨、角膜、神経、心臓弁、尿管の再生に成功し臨床応用にむけて準備を続けています。

こうした研究の発展の中で、従来の発生学の常識で

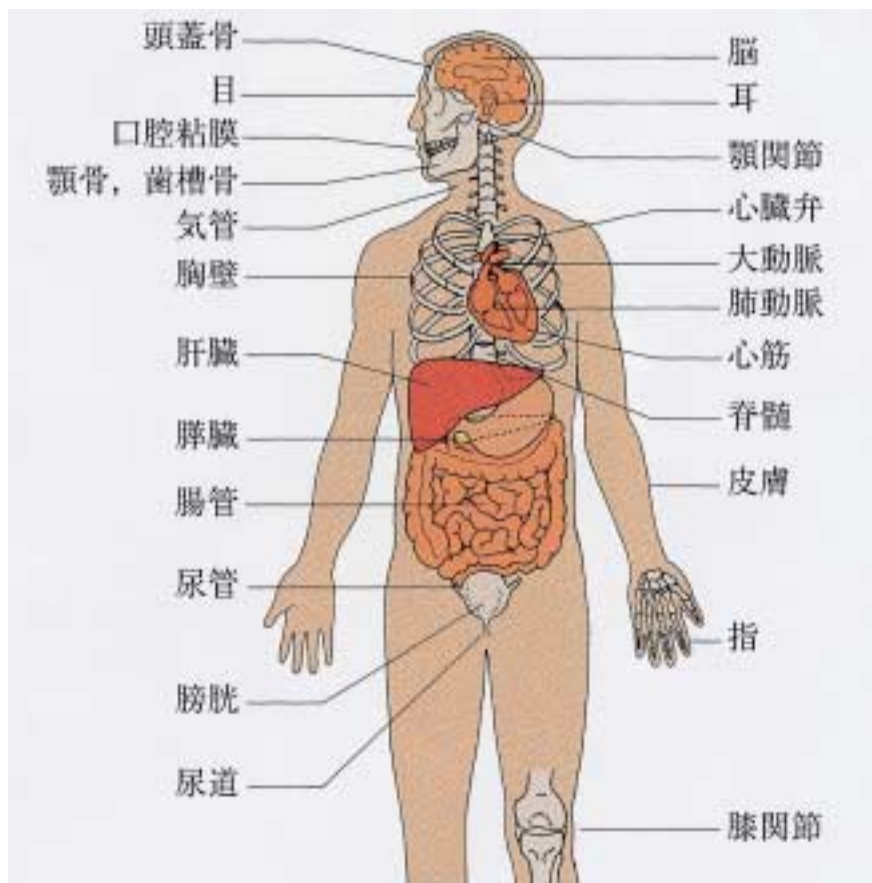


図 1

は想像できないような現象が起こることがわかってきました。例えば幹細胞の可塑性という現象です。これまでの常識では人の細胞種には外胚葉、中胚葉、内胚葉という胚葉起源が厳格に決まっています、それらから特定の臓器が形成されると考えられてきたのです。外胚葉からは皮膚、中胚葉からは骨、軟骨が内胚葉からは肝臓や腎臓といった臓器ができると考えられてきたのです。ところが、中胚葉性の間葉系幹細胞は胚葉起源をこえて、心筋や肝細胞に分化できることがわかってきました。つまり、イモリやプラナリアのような万能細胞が人の体の中にも存在する可能性があることを意味しています。こうした事実を発展させれば将来は、自分の体性幹細胞を使って複雑な臓器を作ることも可能になり、完全な人体再生という夢も実現するかもしれません。

プロフィール

うへだ みのる

昭和24年大阪府生まれ。昭和47年京都大学工学部卒業、昭和53年東京医科歯科大学歯学部卒業、昭和57年名古屋大学大学院医学研究科修了。名古屋大学助手、講師、助教授を経て、平成6年から教授。日本歯科医学会学術奨励賞（昭和62年）、Academy of Osseointegration 10th Annual Meeting 最優秀賞（平成7年）受賞。



INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（14年7月分）

| | 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|----|---|--------|------------|
| 1 | 日本数学コンクール 第3回論文賞のテーマが決まる | 7.1(月) | 中日(朝刊) |
| 2 | 工学研究科分子化学工学教室研究室公開・講演会のお知らせ | 7.2(火) | 朝日(朝刊) |
| 3 | 地域貢献について協議する「社会連携連絡協議会」設立 9日に県、名古屋市と初会合 | 7.3(水) | 読売(朝刊) |
| 4 | 特色生かす任期制導入 厳しい総合評価が重要に 理学研究科・池内 了教授 | 7.3(水) | 読売(朝刊) |
| 5 | 公開講座「芸術と情報 - 電子芸術は科学に接続するか?」を27、28日に開催 | 7.3(水) | 読売(朝刊) |
| 6 | 「テクノフロンティアセミナー」高校生を対象に募集案内 | 7.3(水) | 読売(朝刊) |
| 7 | 野依良治教授のオンリーワンに生きて - 14 - 生きるために学ぶ | 7.4(木) | 読売(朝刊) |
| 8 | 名大に統合申し入れ 愛教大 単独存続困難と判断 | 7.5(金) | 中日(朝刊) |
| 9 | 環太平洋6カ国の国際教育フォーラム 中等教育の課題 今津孝次郎教授 | 7.5(金) | 中日(夕刊) |
| 10 | コーナーキック：大人の態度 教育発達学研究科・金井篤子助教授 | 7.5(金) | 中日(夕刊) |
| 11 | 岐路の共産党80周年 小選挙区に統一候補出せば 法学研究科・後房雄教授 | 7.6(土) | 朝日(夕刊) |
| 12 | サッカーボールを世界中に降らそう 名大院生・古沢さん、賛同者を募集 | 7.6(土) | 朝日(夕刊) |
| 13 | 数学アゴラ夏季集中コースのお知らせ | 7.8(月) | 中日(朝刊) |
| 14 | 8月8日にテクノサイエンスセミナー「持続可能な社会基盤確立を目指して」開催 | 7.8(月) | 中日(朝刊) |
| 15 | 悪性脳腫瘍に遺伝子治療有効 遺伝子治療臨床研究審査委員会確認 | 7.9(火) | 読売(朝刊) 他2社 |
| 16 | 祖国で被災した子どもたちを助きたい 単聯成さんから中国人留学生十数人が募金運動 | 7.9(火) | 中日(朝刊) |
| 17 | きらり：大地震に強い家 実地研究したい 環境学研究科博士課程1年・小島宏章さん | 7.9(火) | 中日(朝刊) |
| 18 | 25・28日、言語文化部などの公開講座開催 | 7.9(火) | 中日(朝刊) |
| 19 | 27、28日、人間情報学研究科公開講座開催 | 7.9(火) | 中日(朝刊) |

| | 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|----|---|-------------------|------------------|
| 20 | 学生街ダノス:教育実習物語 一生忘れない経験 4年・河村智子さん | 7.9(火) | 中日(朝刊) |
| 21 | 県や名古屋市と地域貢献について協議「社会連携連絡協議会」9日に初会合を開催 | 7.9(火) 7.10(水) | 中日(夕刊) 読売(朝刊) |
| 22 | 老年学：介護の夫残し先立つ妻 井口昭久・大学院老年科教授 | 7.10(水) | 朝日(朝刊) |
| 23 | 2003年度の博学入試要項を発表 英語のリスニング試験拡充 | 7.10(水) | 中日(朝刊) |
| 24 | 野依良治教授のオンリーワンに生きて - 15 - 「文理分割」で国衰退 | 7.11(木) | 読売(朝刊) |
| 25 | 医学部は海外6大学の代表者を招いてフォーラム開催 新世紀の医学教育について話し合った | 7.12(金) | 中日(朝刊) |
| 26 | パーミヤン壁画残る 日本人仏教写真家撮影 解説：よく撮影できた 文学研究科・宮治昭教授 | 7.13(土) | 毎日(朝刊) |
| 27 | 中国内陸部で先月起きた水害で破壊された学校再建呼び掛け 中国留学生学友会 会長の単聯成さん | 7.13(土) | 中日(夕刊) |
| 28 | 25・28日(全4回) 言語文化部・国際言語文化研究科公開講座開催 | 7.13(土) | 毎日(朝刊) |
| 29 | 研究室発：医学部・室原豊明教授「血管再生」臨床応用へ | 7.16(火) | 中日(朝刊) |
| 30 | 20日に農学部で日本畜産大学学会シンポジウム学術講演会開催 | 7.16(火) | 中日(朝刊) |
| 31 | 中国でも水害 子供らを救おう 名古屋大医学部で留学生ら募金活動 | 7.17(水) | 読売(朝刊) |
| 32 | 近況：今こそ求められる外交能力 環境学研究科・川田稔教授 | 7.17(水) | 朝日(夕刊) |
| 33 | レモン果皮のフラボノイド体内活性酸素を消滅 生命農学研究科・大澤敏彦教授 | 7.18(木) | 日刊工業 |
| 34 | 環境にやさしいものづくり研究 科学技術会議開く 本学と名工大を中心に「ナノテクを利用した環境にやさしいものづくり構想」に取り組む | 7.18(木) | 中日(朝刊) |
| 35 | 大人と「若ソウ」本音で語ろう！ 大学生グループ 農業体験参加者を募集 | 7.18(木) | 中日(朝刊) |
| 36 | 大学が変わる・国立大学再編:税金を使う価値問い直せ 松尾稔総長 | 7.19(金) | 朝日(朝刊) |
| 37 | 元気企業の秘けつ：雰囲気売る贈り物に 瓶屋・大島社長(名大・経済学部卒) | 7.19(金) | 中日(朝刊) |

| | 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|----|---|---------|---------------|
| 38 | 改革の道：私の提言 就業意識の低さに危機感を 学校は就職指導を充実させよ 経済学研究科・太田聡一教授 | 7 20(月) | 読売(朝刊) |
| 39 | 一昨年の東海豪雨を教訓に愛知県は浸水情報システムを開発 検討委員長：辻本哲朗教授(地圏環境情報) | 7 23(火) | 読売(朝刊) |
| 40 | 文芸人：若い音楽家支援 ルンデあしながクラブ発足10年 鈴木詢さん 名古屋大学管弦楽団の初期指揮者 | 7 23(火) | 中日(朝刊) |
| 41 | 東海バイオファクトリー研究会設立記念フォーラム 29日に、農学国際教育協力研究センターの武田穰教授らが講演 | 7 24(水) | 中日(朝刊) |
| 42 | 野依良治教授のオンリーワンに生きて - 16 - 先生が子供の運命変える | 7 25(木) | 読売(朝刊) |
| 43 | 中部の国立大 企業との共同研究加速 中部地区で共同研究実績トップは名古屋大学 | 7 26(金) | 日経(朝刊) |
| 44 | 素粒子発見の検出装置 岐阜県最先端科学技術体験センターに寄贈 | 7 26(金) | 朝日(朝刊) 他2社 |
| 45 | 自然免疫の経路を解明 理学部の松本邦弘教授、久本直毅助手らと米ハーバード大医学部の共同研究グループ | 7 26(金) | 中日(朝刊) |
| 46 | 遺伝子がすべて? : お酒が飲めない理由 愛知県がんセンター研究所疫学予防部室長・浜島信之さん(名大医学部卒) | 7 26(金) | 中日(朝刊) |
| 47 | 国立科学博物館が小中学生を対象に「野依良治奨励賞」を創設 | 7 26(金) | 中日(朝刊) |
| 48 | 8月3日、「肺の日」公開講座のお知らせ 講師：医学部・長谷川高明教授 | 7 26(金) | 中日(朝刊) |
| 49 | 訃報：理学研究科・斎藤栄教授 24日脳腫瘍のため逝去 | 7 26(金) | 中日(朝刊) 朝日(朝刊) |
| 50 | 26日、医学部附属病院遺伝子・再生医療センターの創設記念式典が鶴友会館で開催された | 7 27(土) | 中日(朝刊) |
| 51 | 改革の道：私の提言・ニーズに合った新事業を 経済学研究科・山田基成助教授 | 7 27(土) | 読売(朝刊) |
| 52 | 産学官でバイオ起業支援 大学の研究者対象 農学部 武田穰助教授が事務局 | 7 27(土) | 日経(朝刊) |

| | 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|----|--|---------|--------|
| 53 | 学長さんが「一流の講義」 市民向け講座「コーディネーター科目」が27日、名古屋工業大で開始 松尾学長が「新しい学術分野の創出の必要性」をテーマに熱弁 | 7 28(日) | 中日(朝刊) |
| 54 | 27日、再生医療めぐり研究成果を報告 東海再生医療研究会の第二回会合が医学部で開催 | 7 28(日) | 中日(朝刊) |
| 55 | 文系の先生集まれ 「環境・エネルギー」でセミナー 世話人代表は山寺秀雄名誉教授 | 7 29(月) | 中日(朝刊) |
| 56 | 博物館で勉強10回 君も「達人」に 国立科学博物館 優秀論文賞に「野依賞」 小・中学生が対象 | 7 29(月) | 朝日(夕刊) |
| 57 | 8月1、2日開催 オープンキャンパスのお知らせ | 7 30(火) | 中日(朝刊) |
| 58 | 旧帝大教授 頭脳流出 定年前に海外の大学などに移籍 「研究に打ち込みたい」 工学研究科・山本尚教授 | 7 30(火) | 中日(朝刊) |
| 59 | 8月4日、ロボット展で講演会 名古屋大学出身で産業技術総合研究所主任研究員の柴田崇徳氏 | 7 30(火) | 中日(朝刊) |
| 60 | 改革の道：技術移転バイオ、ようやく動く「ウイルスを使った抗がん剤」の実用化を目指して医学系研究科・西山幸廣教授と、医薬品開発ベンチャー「エムズサイエンス」の研究室が、来年度中にも臨床試験をスタート | 7 30(火) | 読売(朝刊) |
| 61 | 名古屋圏における都市観光のありかた 第13回 Crec 産官学民セミナーより コーディネーターに奥野信宏総長特別補佐 | 7 31(水) | 毎日(朝刊) |
| 62 | 第10回愛知万博専門部会 「再試行」こそ突破口 堀内守名誉教授 | 7 31(水) | 中日(朝刊) |
| 63 | 文科省 今年度科技振興調整費 新規研究に97テーマ採択 Rho - キナーゼ阻害薬の開発と臨床応用(医学研究科・医学系研究科・貝淵弘三教授) | 7 31(水) | 日刊工業 |
| 64 | 難病中の難病「ALS」に朗報 神経細胞死防く酵素 医学系研究科・祖父江元教授ら発見 | 7 31(水) | 中日(朝刊) |
| 65 | 特集：医療相談 総合保健体育科学センター・佐藤祐造教授が読者の相談に答える | 7 31(水) | 読売(朝刊) |
| 66 | 国際開発研究科主催の公開講座 お知らせ | 7 31(水) | 読売(朝刊) |

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部 企画広報室 企画広報掛
 電話：052(789)2016
 FAX：052(789)2019
 E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

「岡崎高等師範学校跡」記念碑

1949年に新制名古屋大学が発足した際、名大に包括された旧制学校の一つに岡崎高等師範学校があります。岡崎高師は、戦時体制下において科学技術者の動員を計画した国策に沿う形で、理科系の中等教員養成を目的として1945年4月に設置されました。

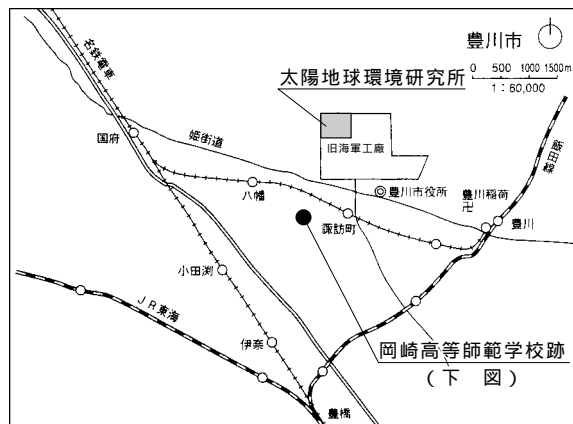
岡崎高師は、その名のとおり、岡崎市内（市立工業学校跡地。現在の愛知教育大学附属岡崎中学校地）に創立されましたが、第1回入学式直前の7月19日深夜の岡崎市空襲により、すべての校舎を焼失した状態で8月15日の終戦を迎えています。その後、同校は市内針崎町の勝鬘寺内に生徒宿舎（振風寮）を設け、三菱重工業針崎工場青年学校を仮校舎として本格的な教育活動を開始するとともに、本格的な移転先の検討を進めました。

その結果、岡崎高師は12月に豊川市内の旧海軍工廠工員養成所（現在の県立豊川工業高等学校地）に、また振風寮も同じ工員養成所の寄宿舎（現在の豊川市文化会館、市立代田小学校地）に移転しました。写真の記念碑は、岡崎高師創立30周年を記念して同校の同窓会「黎明会」によって設置が計画され、豊川市文化会館前庭に1980年6月に建立されました。碑文は、岡崎高師初代校長を務めた水野敏雄の揮毫です。

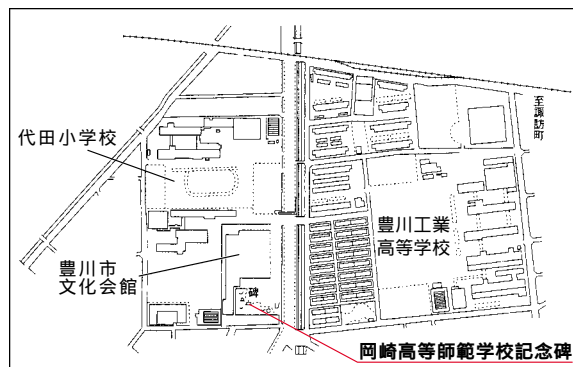
岡崎高師は、新制名大へ包括された際に「名古屋大学岡崎高等師範学校」となり、そこには名大豊川分校（旧教養部）が併置されました。1952年3月、岡崎高師は第4回卒業式の後に関閉校式も挙行され、わずか7年間の校史に幕を閉じました。なお、岡崎高師の閉校にともなって名大豊川分校は名古屋市内の名大瑞穂分校に統合され、名古屋大学分校（旧教養部）となりました。



岡崎高師正門(『岡崎高等師範学校誌』1950年より)



記念碑



名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物に関する情報をお持ちでしたら、
大学史資料室（052-789-2046）へご連絡下さい。